

国富友次郎の和歌

(読みやすさのため原典にない濁点を付しました)

新樹

てり渡る月の影さへもらぬまで

こはのこずるにわか葉さしたり

(『海老井の滴』所収)

卒業生のために

現<sup>うつ</sup>にもゆめにも絶えず思ふかな

わがをしへ子のうへはいかごと

(『海老井の滴』所収)

出征する兵士を駅頭におくれる

親子の別れを見て

国のため死して帰れと励まして

ひと知れずなくおやこころかな

(『海老井の滴』所収)

空襲後雨ふれる時

うたれたる人のなみだか夕立の

雨に血<sup>ちしほ</sup>汐の色は見えねど

(『小屑籠』所収)